

学校自慢

「あそよな」学園物語のはじまり ～Well-Beingな学校を目指して～

八千代市立阿蘇米本学園校長 みねぎし しゅういち 嶺岸 秀一



1 「あそよな」学園キックオフ

昨年4月、三つの小学校と一つの中学校を統合し、市内初の義務教育学校である阿蘇米本学園として開校した。本校の合言葉は「あえて未完成な学校」。これまでの概念に捉われずに、子供たちと教職員、保護者と地域が協力しながら、新しい学校創りに挑戦している。

2 メンターとメンティーから学ぶ

義務教育学校の最大のメリットが、身近にいる先輩の姿から学べることである。5～9年生を対象に行った6月の運動会では、9年生が全体のリーダーとして活躍し、8年生は5～7年生の3学年に踊りを教えた。5～7年生の児童生徒は、運動会全体をリードした9年生や、丁寧に踊りを教えてくれた8年生の姿から多くのことを学び、9・8年生は上級生としての自覚が深まることで、最高のメンター・メンティーの関係が構築された。

また、本校では全学年で無言清掃に取り組んでいる。それぞれの清掃箇所において、上級生が下級生の面倒を見て、一緒に無言清掃に取り組んでいる。



特に1・2年生の清掃は、前期課程のリーダーである6年生が丁寧に教えている。

このように、本校ではいろいろな場面で1～9年生でのメンター・メンティーの関係を構築することで、子供たちの成長の機会を設けている。

このように、本校ではいろいろな場面で1～9年生でのメンター・メンティーの関係を構築することで、子供たちの成長の機会を設けている。

3 誰一人取り残さない、カラフルな取組

本校には所謂、小（前期）中（後期）学校の教員が在籍している。開校当初は、子供以上に教職員間の「小中ギャップ」を埋めることに苦心することもあったが、全職員が開校を自分事として捉え、積極的に学校運営に参画し、様々な課題を乗り越えてきている。



また、前・後期課程の教員が一つの組織であることを生かし、積極的に前期課程から教科担任制による授業や乗り入れ授業を導入している。1・2年生は音楽と言語活動、3・4年生では音楽、外国語、算数、理科、図工、そして5・6年生では社会、理科、音楽、図工、外国語を学級担任以外の教員が指導を行っている。特に5・6年生の理科と社会、そして6年生の音楽を後期課程の教員が指導を行うことで、前後期課程の学びの継続性を意識した取組を行っている。さらに体育では、1～6年生の全学級で、学級担任と後期課程の体育科教員が指導にあたっている。

4 同志と共にセカンドステージへ

開校にあたり、様々な取組を行う中で、多くの課題に直面してきた。しかし、それらの課題に対して、常に挑戦し続ける教職員のおかげで、開校一年目が終わろうとしている。これからも、このすばらしい同志と共に、教職員や子供、保護者と地域の四者にとって、真にWell-Beingな学校を創っていきたい。